

一二、世界新地理學の大成

エリゼ・ルクリュの學問的大事業は主としてスイス亡命中に大成されたものである。精力絶倫な彼は、その不便な亡命生活中にあつて、單に歴史上の一大事件とまで稱せられる大著作を世に公にしたのみならず、近代思想史上に最高最大の主流となれる無政府主義を完成し、且つその運動の精神的中心となつて、此の困難な事業を支えたのである。彼はルガノに居る間に、『フランス共和制』『デロンド』『改造』(Reforme)等に盛んに諸種の文章を書いている。更に『人民年鑑』(Almanach du Peuple)に『百姓の兄弟に』や『財産に關する數語』を掲げ、パリの『地理學報』(Bulletin du Géographie)に重要な二論文即ち『スイスの雨』と『アラル海の歴史』とを出している。しかるにルガノに在る間に彼は不幸にも第二の夫人に死別した。一八七四年、彼はジュネーヴ湖畔のツール・ド・ベルスやヴウエーに滞在しつゝ近く世に問うべき大著作の準備として地理學の文献資料の集蒐排列に心身を傾けつゝ、しかも同時に諸方に論文を送ることを絶たなかつた。

彼は一八七五年に、ジュネーブに於て、地中海の歴史に就いての講演を公開した。この年にまた彼は第三番目の夫人と結婚した。それは爾後三十年間のエリゼの生涯の好伴侶となつた夫人である。彼の女は良人の青年的強烈さに比して頗る溫和優雅な婦人にしてしかも學者として秀でた植物學者、昆虫學者であつた。彼はこの年から、『世界新地理』の發刊を開始し、爾來毎年一冊づつを出して十九卷の大作を完成したのは一八九二年であつた。それは毎卷八九百頁の大冊を成し、挿入圖版は少くとも毎卷二百乃至二百三十に及んでいる。クロボトキンの記するところによると、毎卷に引用せる書籍數は九百冊から一千冊に及んでいる。私は初めてルクリュ家を訪うた時「フランス語國に來た以上はフランス語を話さねばならぬ、それがフランス語國で生活する第一要件だ」とてこの『地理學』第七卷東亞の部を読まされた。ふつつかない貧しい語學力を以て『日本の部』を読んだ時、私は始めて日本という國を知つたように感じた。一般ヨーロッパ人からは、支那の屬國でもあるが如く思われていた六十年前に書かれた本書が、かくも精確に日本の自然と民族とを描寫し躍動せしめる技倆には、眞に驚かされざるを得なかつた。この書に就て、ブリュッセル市新大學總長ド・グレフ博士は云つてゐる。

「この地理學の發行は、歴史的一大事件である。ルクリュはカントとヘルデルとの思想を實現し、フムボルトとリッテルとの不滅の事業を整理し完成して、全社會科學の鞏固な基石たらしめた。更に一層精確に言えば、自然と人間とを密接に結合させて、社會現象はこの二要素の不可分の結合の結果に他ならないことを感ぜしめた。」

「かくてルクリュの地理學は、凡そ政治的及び社會的範圍に於て考察される居住人間や、原産動植物や、氣候風土や、礦物學や、地質學や、地球上の全形狀を包含するのであつた。この地理學はただ單に數學的でも、物理的でも、政治的でも、人類學的でも、歴史的でもなくなつた。即ちそれは最も廣い意味で社會的なのである。それはプトレメウス、ストラボン、ヴィコ、カント、ヘルデル、フムボルト、リッテル、ペシエル(Peschel)ホル(Kohl)及びラツェル(Ratzel)等の諸思想を統合したものである。」

一八七五年から七八年にかけて、彼は『勞働者』(Le Travailleur)『マルセイエーズ』(Marseillaise)及び『リオン評論』(Revue Lyonnaise)等の社會主義新聞に數多き論文を出したが、それは言わば『地理學』の疲勞を癒やす爲めであつた。またこの間に、イタリーに旅行し、ロー

マやナポリに滞在し、ここで數ヶ月間地理學的文献を調査した。スイスに歸つて、一八七九年にクラレンスに新住居を構えて『地理學』の續刊に傾倒した。クラレンスは會てジャン・ジャック・ルソーが居住したところとして有名であるばかりでなく、またジュネーヴ湖畔の風光明媚な形勝の地であつた。一八八〇年には『進化と革命』(Evolution et Revolution)という小冊子を書き、更に『山の歴史』(Histoire d'une Montagne)という傑作を書きつゝゐる。この『山の歴史』は前の『小川の歴史』にも優る美しい散文詩だと言われる。この他に彼は諸河川に就ての研究を『アメリカ百科事典』に書いた。彼が生涯の苦患となつた胸膜炎が起つたのは、この年からである。

一八八一年から八二年にかけて、彼は、豫て農業的殖民を試むべく興味を寄せていたアルジェリヤに旅行した。この間に於て大作『地理學』やその他の著作出版を繼續していたことは勿論である。一八八二年十月十四日、彼はその時結婚せる娘達と婿達とに對して美しい訓示を與えてゐる。この結婚には一切の舊慣習、一切の教會的儀式を排除して、祝清者として家長たるエリイと父たるエリゼだけが立會い、エリイはここで、結婚の歴史及び進化に就て、素晴らしい立派な講演を與えた。

一八八四年から八八年にかけて、彼は『地理學』にその精力を集中しつつも、なお數多き論文を數多き新聞に送つてゐる。一八八六年にベルギーで發行せられる『新社會』(Société Nouvelle)に寄稿し始めたが、これが同國と關係を結ぶ端緒となつた。同年、彼は友人にして助力者たるレオン・メチニコフ(Leon Metchnikov)の美著『文明と歴史的諸大河』(La civilisation et les grands fleuves historiques)に卓越せる序文を書いて公衆の注意を喚起した。このレオン・メチニコフは若く未完成にして逝去したが、彼は有名な細菌學者、バスタールの後繼者たるエリイ・メチニコフ(不老長壽論の著者)の兄弟である。このエリイがその小名、その精神傾向、その容貌に於てエリイ・ルクリュにそっくりその儘であつたと言われ、二組の學者兄弟の對比が世の語り草になつた。エリゼ・ルクリュは、この時代に再びアメリカに旅行したが、それは『地理學』の爲の實地踏査を目的としたものであつた。一八九〇年、彼はスイスを去つてフランスのセーヴル(セイヌ・エ・オアーズ縣)に假寓した。

これより先き、彼はスイスのジュラ連盟に参加して當時成長しつつあつた無政府主義運動の精神的思想的支柱となり、『勞働者』『叛逆者』等の機關紙に執筆し、會合に出て討議に参加し、無

政府共產思想を確立せしむるに至つた。一八八三年には世界社會運動史上に有名なリオン裁判事件に於てクロボトキンを始め四十七名のアナキストが、インタナショナルに加盟したという單なる理由によつて五ヶ年以上の刑に處せられた。この裁判の結果、クロボトキンは長い獄中生活に入つたが、この間に於て、エリゼはこの幽囚中の同僚の文章を編纂して出版することになつた。それはクロボトキンの最初の無政府主義的著作『一叛逆者の言葉』で、ルクリュはこれに善い序文を書いてゐる。その中の數句をここに摘録しよう。あの當時の形成をそれによつて察知することが出来るであらうから。

二年半以來、ビエール・クロボトキンは、獄中にあつて、その同胞の社會から切り離されてゐる。彼の苦役は辛いことだが、彼の心情を最も動かすところの諸問題に就て彼を沈黙させることは、また別様に苦痛である。……

けれども、たとい、あのクレルヴォーの囚徒が、最早やその監房の奥で同僚達と會見するの自由を有せないとしても、少くとも同僚達は、あの友が先きに發表した言葉を集纂して、彼を偲ぶことが出来る。それは私の充し得べき義務であつて、また私はその仕事に従ふことを名譽とする。一八七九年から一八八二年にかけて、クロボトキンが無政府主義新聞『La Revolté』

に書いた諸論文は、偶然の諸事件に逐次しないで、論理的順序に従て一冊の書として發行すべき性質のものであるように私には思える。思想の熱誠は、これ等の論文に必然的統一性を與えた。科學的方法に忠實な著者は、先ず第一に、汚辱と、惡弊と、乖離や戰爭の要素と、を存する社會の一般的形勢を闡明し、諸國に現われる頽廢の諸現象を研究し、そして吾々に示すに、累積する廢墟に生ずる龜裂を以てする。……

彼が亡命と拘禁とを経験せねばならなかつたのも、彼の美德そのものの爲ではないか？彼の犯罪は、貧者や弱者を愛したということなのだ。彼の大罪は、彼等の爲に辯護したということなのだ。輿論は一致してこの男を尊敬する。……

この著作が公けにされるに際して、フランスは選舉の危機の眞最中にある。私は元より、この書を候補者達に讀んで貰わうなどと要求するほどナイーヴではない。——彼等には果すべき他の『義務』がある——しかし私は讀者諸君にこの『一叛逆者の言葉』を手にすることを勧めする。そして特に『代議政體』という一章を知らせて置く。議會に於て郷黨を代表する名譽を詐取しようと各方面から起つた人間達に對する信用が、如何にして辯護されるかということを諸君は本章に於て讀まれるであらう。……彼等が議會に入る時は純潔であつたと想像しても、

如何にして墮落せずに出て來ることができようか？ こうした陷穽的環境に感化せられて、彼等はあたかも宿命的機械に牽引せられるかの如く、左から右へと回轉する。時計の人形は、立派な面持で姿を現わして、時表板を強く打つが、それから直ぐに背を向けて、壁の中に衰れにも縮こまつてしまう。

その救済は、決して新しい主人の選擇にあるのではない。されば吾々は、基督教の敵である吾々無政府主義者は、自らクリスチャンだと稱する全社會に向つて、彼等が神だという一人の男の「誰に向つても、主よ主よと言う勿れ」という言葉を再記せねばならぬ。各人が自分の主人公であるべきだ。……

一八八五年十月一日瑞西クラレンスに於て

エリゼ・ルクリュ

一八九二年に『地理學』最後の第十九卷が發行され、その最後の言葉の中に、更に新たな著作の計畫あることを報じている。それは蓋し、彼の最後の大著であり、彼の思想の總結成であり、最高峰であるところの『世界文化地史』とも言うべき『人と地』(L'Homme et la terre)の豫告

であつたろうと思う。同じ年にクロボトキンの『パンの略取』(La Conquête du pain)が出版され、エリゼは又、それに序文を書いている。それに就て、社會學者ド・グレフが言を極めて讚美したことは前に述べた通りである。

一八七三年に第一巻を出し、一八九二年に最後の第十九巻を完成した彼の最大著『世界新地理學』は各巻いずれも八九百頁の大冊で、世の學者はこの書の刊行を以て「歴史上の一大事件である」と稱し、「彼はこの書に於て、カントとヘルデルとの思想を實現し、フムボルトとリッテルとの大事業を完成した」と評している。クロボトキンの記するところによれば、エリゼはこの『地理學』一冊を書くために少なくとも一千冊の書籍を参考にした、という。それが十九冊も續いているのだから、この著作はまさに超人的のものというべきであつた。